

水田から流下したニゴロブナ・ホンモロコ稚魚の移動について

岡本 晴夫・氏家 宗二・根本 守仁

1. 目的

琵琶湖の周囲に点在する内湖は、かつてはフナ、モロコ等コイ科魚類の産卵繁殖場として、また、仔稚魚の育成場所として機能していた。しかし、現在の内湖は、オオクチバス等の外来魚の繁殖と在来魚の減少により、その機能は低下していると考えられる。そこで、内湖が本来持つ在来魚類の育成機能の回復を目的として、県内最大の内湖である西の湖において、排水が西の湖へ流入する水田にALC耳石標識を付けたニゴロブナおよびホンモロコのふ化仔魚放流を行い、稚魚の移動について調査を実施した。

2. 方法

排水が西の湖へ流入する水田（北之庄）に、5月中旬から下旬にALC耳石標識を付けた2日齢のニゴロブナおよびホンモロコの仔魚を收容し約1ヶ月間育成後、水田の中干し時に稚魚をそれぞれ流下させた(水田の位置、收容尾数、流下尾数等については、別頁にて報告)。その後、8月まで西の湖(周辺の水郷や水路等含む)において、ビームトロール網(以下「トロール網」)による採捕を6回、張網による採捕を4回実施し、稚魚の動向を調査した。調査を実施した定点は図1のとおり。

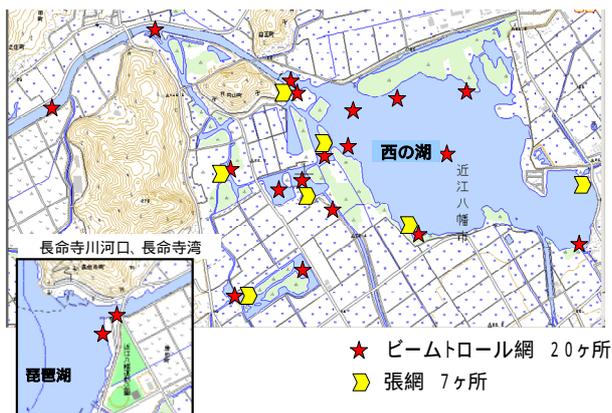


図1 ビームトロール網および張網調査定点

3. 結果

水田からの流下直後に流下場所付近の水郷内で一定標識魚が採捕された以外は、採捕数が少なく水田から流下後の移動について明確な動向は把握できなかった(図2、3)。

なお、今回採捕した当歳魚サンプル中の北之庄水田由来魚の割合は、フナがトロール網で0.0%、張網で42.8%であった。同様にホンモロコはトロール網で41.8%、張網で81.2%であり、フナのトロール網を除き水田由来の魚の割合が高かった。次年度以降はより効率的なサンプリングを行い、水田 西の湖 琵琶湖等の詳細な移動の把握を行う予定である。



図2 ビームトロール網採捕調査結果

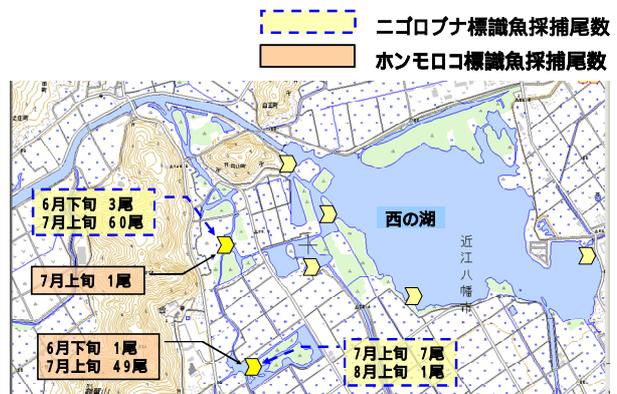


図3 張網採捕調査結果